



## 七十七銀女川支店遺族・田村さん

# 大学生連れ 教訓伝える

東日本大震災の津波で長男の田村健太さん(当時25)を失った孝行さん(63)と妻の弘美さん(61)が12日、群馬県上野村の「御巣鷹の尾根」を訪れ、日航ジャンボ機墜落事故の犠牲者に祈りをささげた。安全

学生らと共に、墜落事故の犠牲者の墓標にビールを供える孝行さん(手前右)と弘美さん(12日午前10時40分ごろ、群馬県上野村)

な社会の実現に向けて教訓を伝えようと、当時を知らない大学生ら約10人を誘い、一緒に尾根を自指した。七十七銀行女川支店(宮城県女川町)に勤めていた健太さんは上司の指示で近くの高台でなく2階建ての支店屋上へ逃げ、津波にのまれた。田村さん夫妻は原因究明と再発防止を求める中、墜落事故の遺族とつながり、2015年から慰霊

登山に参加している。

同行したのは報道現場で働くことを望む大学生や、防災教育に力を入れる小学校教員ら。孝行さんが語り部活動を通じて知り合った若者たちに声をかけた。一行は、急斜面に犠牲者の墓標が並ぶ「スゲノ沢」や、墜落直前の機体が山肌を削

った「U字溝」など、事故の痕跡で足を止めながら当時に思いをはせた。

記者志望の東北大大学院2年矢崎碧さん(24)は仙台市青葉区に「航空機が尾根にぶつかり520人が亡くなった事実を肌で感じた」と語った。新潟県上越市の小学校教諭霜崎大知さ

人(30)は「与えられた命を精いっぱい豊かに生きる大切さを感じた。学びを新学期、子どもたちに伝えたい」と話した。

人命最優先の企業防災や組織の安全文化の確立は容易でない。孝行さんは「生きていく間に全ては変えられない。命と向き合う姿勢を現場で感じてほしい、若い世代にバトンを渡したい」と強調。弘美さんも「事故や災害を直接知らない世代も、遺族の話を知り、現場を訪ねたりして何かを感じてほしい」と願った。

(編集部・小関みゆ紀)